

ベトナムとインドネシアにおける日本語教育

Japanese language education in Vietnam and Indonesia

宮脇敏哉・寺田篤史・中嶋克成

はじめに

2011年より、ベトナムとインドネシアにおいて各大学で講義や講演会、説明会を毎年1~3回、おこなってきた。ベトナムでは、ハノイ大学とハノイ貿易大学、ハノイ国家大学外国語大学、インドネシアでは、ダルマプルサダ大学とナショナル大学、サラスワティ外国語大学、ウダヤナ大学（サラスワティ外国語大学と合同）である。

両国における日本語教育に定評のある大学である。そこでおこなった学生に対するアンケート調査の結果を踏まえて、日本語教育について考察をおこなった。

I. 我が国における留学生の状況

本論において日本における各国からの留学生の状況を勘案して、現状を把握した。資料は、日本学生支援機構（JASSO）の2017年の調査結果を使用した。そして近年におけるベトナムのハノイ大学とインドネシアのサラスワティ外国語大学にておこなったアンケート調査に基づいて比較検討をおこなった。

両大学における集中講義は、「経営学」の方面からの日本語教育の位置づけである。経営学=マネジメントであるが、普段あまり接していない日本語が多く登場しているのが特徴と言える。日本での経営学は、昭和初期におけるドイツ系から昭和中期以降におけるアメリカ系への大きな転換期があった。

日本学生支援機構が2017年に発表した「平成29年度外国人留学生在籍状況調査等について一留学生受入れの概況一」の調査結果によると、平成29年度の日本に滞在する留学生数は267,042人であり、平成28年度と比較して27,755人増加（前年度比11.6%）している。出身国別でみると、中国・ベトナムの上

位 2 か国で 168,931 人と 6 割強(63.3%)を占めている(図表 1)。留学生数の増減率でみると非漢字圏(スリランカ・ミャンマー・インドネシア・ベトナム)の大幅な増加が見られる。

図表 1. 出身国(地域)別外国人留学生数上位 10 か国

国(地域)名	留学生数		前年度比増減	
	平成 29 年度	平成 28 年度	人数(人)	増減率(%)
中国	107,260	98,483	8,777	8.9
ベトナム	61,671	53,807	7,864	14.6
ネパール	21,500	19,471	2,029	10.4
韓国	15,740	15,457	283	1.8
台湾	8,947	8,330	617	7.4
スリランカ	6,607	3,976	2,631	66.2
インドネシア	5,495	4,630	865	18.7
ミャンマー	4,816	3,851	965	25.1
タイ	3,985	3,842	143	3.7
マレーシア	2,945	2,734	211	7.7
その他	28,076	24,706	3,370	13.6
合計	267,042	239,287	27,755	11.6

出所：平成 29 年度外国人留学生在籍状況調査等について－留学生受入れの概況－
https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student/_icsFiles/afieldfile/2017/12/25/data17_brief.pdf をもとに作成(参照日 2018 年 8 月 27 日)

徳山大学では、外国人学生が学生総数の 2 割程度を占め、漢字圏出身の学生は減少傾向にある一方で、ベトナム・カンボジアなど非漢字圏の学生が増加傾向にある(山本・立部(2016))。山本・立部が指摘するように非漢字圏出身学生が学習面・生活面において日本語習得状況に由来する問題を抱えがちである。

また、日本語への苦手意識から出身国メンバーで集まって行動することが多くなればそれだけ日本語習得への障害となりうる。授業時や試験時取るべき行動・態度などの文化的な差異も考慮すべき要素となるだろう。入学後の留学生の学習環境・生活環境を整えることがこうした課題に対応するために必要となるだろう。

入学後の体制作りの努力はもちろんだが、徳山大学において非漢字圏からの留学生の増加傾向が今後も続くとするれば、留学生受け入れをいかにするかも大きな課題である。今後徳山大学に入学する可能性もある海外で日本語習得に励む外国人に対して日本語教育への意識を探ることは、そのために意義のあることであろう。

本文で詳述するが、今回の調査対象であるベトナム、インドネシアの学生いずれも日本語学習や日本での就労に対する意欲が高く、日本語で行われた経営に関する授業に対しても（主観的には）理解が高いという結果が出ている。こうした結果を踏まえて、例えば海外で日本語を学ぶ外国人に対して、現地での日本語学習時に同時にビジネスについて学び日本語で経営学を学び修めるビジョンを明確に持ってもらうことで、留学後の学習意欲の持続を図るといったことが考えられるかもしれない。なにせよ、今回の調査が日本への留学を希望する外国人の日本語教育へのヒントとなれば幸いである。なお、今回の調査結果はあくまでも調査した学校での意識調査であって、国ごとの傾向などを示すものではないことに留意されたい。

II. 留学生の受入れ状況

2008年、日本政府は「留学生30万人計画」¹を発表した。これは、「日本を世界に開かれた国とし、人の流れを拡大していくために重要である」として、福田元総理が第169回国会（2008年1月）の施策方針演説の中で打ち出したものである²。政府はこの計画を基に、日本への留学生を2020年までに、当時の14万人から30万人に増やそうとしている。

「留学生 30 万人計画」では、中教審答申(2003)などを踏まえ、「日本の大学大学院の国際化」だけでなく、「国際競争力強化」、「国家安全保障」の観点に立った計画であることが示された。岡田ら(2011)は、その背景について「1990年代から急に深刻化しはじめた少子高齢化社会問題があり、その対応として国際的な留学生の獲得に向けた熾烈な競争への参加を余議なくされたため」³と指摘している。

Ⅲ. ベトナムにおける日本語教育

2011年から2018年までの8年間にベトナムで多くの高校や専門学校、そして各大学において講義や講演会・説明会を担当してきた。特に集中講義を担当させていただいているハノイ大学では、毎回1週間にわたって学生と接してきた。

ハノイ大学の学生は、非常に積極的であり、日本語を学ぶ意識が高いと思われる。筆者の専門は、「経営学」であるので、使用する日本語が学生にとって、あまり聞いたことのない用語が多く出てくる。しかし世界的な「経営学」重視の流れに沿った教育が必要不可欠であると考えられる。

Ⅳ. インドネシアにおける日本語教育

2011年から2018年までの8年間にインドネシアで多くの学校や各大学において講義や講演会・説明会を担当してきた。毎年、ジャカルタのダルマプルサダ大学において講演会、そしてデンパサールのサラスワティ外国語大学において集中講義を担当している。経営学を中心とした日本語教育をおこなっている。何回も講義をしていて感じたのは、ただ経営学を理論的に説明するだけでなく、日本の諸事情が理解できる映像や写真を多用すると学生も興味を持って講義に参加してくれることが判明した。

V. ベトナムとインドネシアにおける大学生調査結果（日本語について）

図表 2. 愛好度

問 1：日本語は好きですか

	はい	いいえ	わからない	合計
インドネシア	30	1	1	32
ベトナム	123	9	6	138
合計	153	10	7	170

出所：筆者作成

図表 2 を参照すると、基本的な回答数がインドネシア 32 名とベトナム 138 名であった。よって素数の比較ではなく、割合で比較検討する必要がある。2 の図表からは、日本語が好きインドネシア 93.7%、ベトナム 89.1%であった。

続いて図表 3-1、3-2 において大学生がいつくらいから日本語の勉強をはじめたかを提示した。

図表 3-1. インドネシア

問 2：日本語の勉強をいつごろからはじめましたか

インドネシア	度数	構成比
中学生までに	3	9.4%
高校生	14	43.8%
大学生以上	15	46.9%
合計	32	100.0%

出所：筆者作成

図表 3-2. ベトナム

問 2：日本語の勉強をいつごろからはじめましたか

ベトナム	度数	構成比
------	----	-----

中学生までに	4	2.9%
高校生	4	2.9%
大学生以上	130	94.2%
合 計	138	100.0%

出所：筆者作成

図表 3-1、3-2 においては、両国の「日本語の勉強をいつから」はじめたのが判明した。両国では、大学生からが 85.3%、高校生からが 10.6%、中学生までが 4.1%であった。比較検討するとインドネシアでは、大学生からと高校生からが 40%半ばで拮抗している。ベトナムでは、圧倒的に大学生からで 94.2%からであった。

図表 4-1. インドネシア

問 3：毎日、日本語の勉強を何時間くらいしていますか

インドネシア	度数	構成比
1 時間内	29	90.6%
2 時間	2	6.3%
3 時間以上	1	3.1%
合 計	32	100.0%

出所：筆者作成

図表 4-2. ベトナム

問 3：毎日、日本語の勉強を何時間くらいしていますか

ベトナム	度数	構成比
1 時間内	63	45.7%
2 時間	53	38.4%
3 時間以上	21	15.2%
空欄・不明	1	0.7%
合 計	138	100.0%

出所：筆者作成

図表 2, 3, 4 においては、毎日日本語の勉強をどのくらいおこなっているか回答を得た。両国では、3時間以上が 12.9%、2時間が 32.4%、1時間内が 54.1%であった。

インドネシアは、3時間以上が 3.1%、2時間が 6.3%、1時間内が 90.6%であった。ベトナムは、3時間以上が 15.2%、2時間が 38.4%、1時間内が 45.7%であった。

図表 5. ひらがな

問 4：ひらがなは、書けますか

	はい	いいえ	合計
インドネシア	32	0	32
ベトナム	136	2	138
合計	168	2	170

出所：筆者作成

図表 6. カタカナ

問 5：カタカナは、書けますか

	はい	いいえ	わからない	合計
インドネシア	31	0	1	32
ベトナム	136	1	1	138
合計	167	1	2	170

出所：筆者作成

図表 7. 漢字

問 6：漢字は、書けますか

	はい	いいえ	わからない	空欄・不明	合計
インドネシア	19	5	7	1	32
ベトナム	128	5	5	0	138
合計	147	10	12	1	170

出所：筆者作成

図表 5, 6, 7 において学習内容について検討した。ひらがなについては、インドネシアは、100%理解している。ベトナムは、98.5%であった。カタカナは、インドネシアは、96.8%が理解している。ベトナムは、98.5%であった。漢字は、インドネシア 59.3%が理解している。ベトナムは、92.7%であった。

VI. 調査結果

ベトナムとインドネシアの学生調査結果は、日本語教育を受けはじめたときに連動して、大学生になってからの日々の勉強時間の差になって表れていることが明らかになった。

ベトナムでは、94.2%の学生が大学から日本語教育を受けており、大学での勉強時間が1時間と2時間で84.1%となっている。インドネシアでは、高校生と大学からがそれぞれ40%半ばであったがスタートが早いのが原因と思われるが勉強時間の1時間内が90.6%となっている。

ひらがなやカタカナ、漢字の理解度は、ひらがなとカタカナについては、両国ともに理解度が高かったが、漢字については、マレー語主体のインドネシアの理解度が低くなっている。

VII. 研究の今後の課題

本論においては、インドネシアにおけるアンケート調査人数が少なく、精度に問題があると考えられる。2019年度にインドネシアにおいて再度同じ内容で調査して、できればベトナムの学生と同数近くにする必要があると考える。

そして今回は、多くのデータを取得しているが、一部のみの検討であった。今後の課題としては、残りの質問項目についてもすべて検討する必要がある。

おわりに

ベトナムとインドネシアでの講義や講演会を、毎年数回ほどおこなっているが、本年3月にはじめてアンケート調査をおこなった。ベトナムやインドネシアの学生の日本語習得に少しでも貢献できればと考えている。

そしてわが国に留学している留学生に対する経営学教育に役立たせたいと考える。また本学が立地している地域の新聞や研究会などにおいて両国の日本語教育が活発におこなわれていることを発信する。

本論は、2018年10月17日に開催された国際シンポジウム（ハノイ大学）の国際学会発表内容を加筆再編したものである。

謝辞

ハノイ大学のグエン ティ ミン フォン先生、ラン アイン先生には、いつもご連絡をいただき感謝申し上げます。

そしてサラスワティ外国語大学の竹村先生、宍戸先生、ダルマプルサダ大学エコ先生に感謝申し上げます。

最後に本年、沖縄でお亡くなりになったダルマプルサダ大学のシャムスル先生のご冥福をお祈りいたします。

¹ 文部科学省・外務省・法務省・厚生労働省・経済産業省・国土交通省(2008):「留学生30万人計画」骨子

<http://www.kantei.go.jp/jp/tyoukanpress/rireki/2008/07/29kossi.pdf>

² 首相官邸(2008): 第169回国会における福田内閣総理大臣施政方針演説

<https://www.kantei.go.jp/jp/hukudaspeech/2008/01/18housin.html>

³ 岡田昭人・岡田奈緒美(2011): 日本における留学生受入れ政策の史的展開過程と現状に関する一考察.学苑総合教育センター国際学科特集,847,11-21.